

# 『サーダナ・マーラー』における マーリーチーの成就法

園 田 沙 弥 佳

## 0. はじめに

現在発表者はインド密教における五護陀羅尼 Pañcarakṣā を対象に、経典から神格化に至った信仰の展開について研究を進めている。インド後期密教の時代において、五護陀羅尼を含む「陀羅尼」(dhāraṇī) は主に女尊として神格化され、インド、ネパール、チベットなどにおいて信仰の対象となった<sup>1)</sup>。今回取り上げるマーリーチー (Mārīcī, 摩利支天) もまた五護陀羅尼と同様に、特定の陀羅尼経典と関係している女神である<sup>2)</sup>。本研究では、インドの学匠アバヤーカラグプタ Abhayākaragupta が<sup>3)</sup> 11-12 C 前半頃に編纂した成就法集『サーダナ・マーラー』 *Sādhanamālā* (略号 SM)<sup>3)</sup> no. 134 Kalpoktamārīcīsādhana (「儀軌所説マーリーチー成就法」)<sup>4)</sup> を中心に取り上げ、その特色を明らかにする。本成就法は、インドで実際に作例が確認されている三面八臂のマーリーチーを本尊とした成就法である。インド後期密教におけるマーリーチーの特色を解明することで、同時期に盛んであった五護陀羅尼信仰の展開を解明する手掛かりとしたい。

## 1. 女尊マーリーチー

マーリーチーは、サンスクリット語で陽炎、日光、月光、曙光等を意味する “mārīcī” が神格化された女神である<sup>5)</sup>。ヒンドゥー教の宗教詩バガヴァッドギター *Bhagavadgītā* では風神マルトとして登場する<sup>6)</sup>。その尊容の形成には、インド神話における太陽神スーリヤとスーリヤの眷属ウシャス<sup>7)</sup>、そして「天の赤い猪」とよばれるルドラとの関連性がある<sup>8)</sup>とされている。インド神話の既存のイメージから形成されたマーリーチーは、後に仏教のパンテオンにも組み込まれるようになり、陀羅尼としても知られるようになった。

マーリーチー信仰はインドのパラ朝 (8-12 C) 以降の密教時代に広まったとされる。その作例はパラ朝期の仏教女尊のうち、ターラーに次いで2番目に多

いと言われ<sup>9)</sup>、インドで特に普及していた女神であった。森 (2001, 86; 89) によると、インドから出土したマーリーチーの作品について、三面六臂<sup>10)</sup>、三面八臂、六面十二臂 (オーディヤーナ・マーリーチー) が確認されているという。他方、観想上では上記以外の姿のマーリーチーも説かれている。SM には16種のマーリーチー成就法が収録されており、一面二臂のほか、三面八臂、五面十臂、六面十二臂、三面十六臂のマーリーチーの尊容が説かれている<sup>11)</sup>。

マーリーチーの先行研究には、インドにおける太陽神とマーリーチーの関係や実際の作例にみられる特色等が詳細に解説されている森雅秀氏<sup>12)</sup>の研究のほか、足利惇氏氏による『摩利支天陀羅尼』*Ārya-mārīcī-nāma-dhāraṇī*<sup>13)</sup> および SM no. 142<sup>14)</sup>の校訂、さらに高橋尚夫氏による SM no. 142, P no. 3661の和訳等がある<sup>15)</sup>。また、SM のテキスト校訂を行ったバツチャリヤ氏<sup>16)</sup>、および、頼富本宏氏・下泉全暁氏<sup>17)</sup>の研究では、密教諸尊の図像的特徴の解説の中にマーリーチーが含まれている。従来の研究では SM のマーリーチーの図像的特色が示されている一方、対応する儀軌の次第等は省略されていることが多い。本論文では先行研究を基盤として、SM no. 134の内容構成の把握を通じ、マーリーチー成就法の特徴を明らかにする。

## 2. SM no. 134 「儀軌所説マーリーチー成就法」次第

前述の通り、no. 134は三面八臂のマーリーチーが中尊として説かれる。以下、概略を述べよう<sup>18)</sup>。

### [1] 観想の準備

[1.1] 魔障退散の儀礼 まず観想の準備として聖なる女尊マーリーチーに帰依してから、「オーム、パット」と唱え、心臓と眉間と頭頂において忿怒拳を布置してから、「オーム、マーリーチーに、魔障らを追い払え、フーム、パット」と唱え、諸々の魔障を押しつぶす。

[1.2] マーリーチーの招請 その後、自身の心臓の上で OM 字が変化した日輪において黄色い MĀM 字を観想してから、放出された多数の光線によって集め、世尊母 (マーリーチー) を引き寄せ、眼前の虚空に留める。

[1.3] マーリーチーの尊容 マーリーチーの体色は白色で三面八臂、各面に三眼を持つ。三面のうち、右面は赤く、左は黒い猪 (vāraha-mukhī) である。右の4臂に金剛杵・鉤 (aṅkuśa)・矢 (śara)・針 (sūci)、左の4臂にアシヨーカの樹の芽 (asoka-pallava)・弓 (cāpa)・糸 (sūtra) を持ち、タルジャニー印を結ぶ。大日如来の

王冠を着け、塔廟の中に住し (chaitya-garbha-sthitam), 赤い上着を着用し、7匹の猪が引く戦車に乗り (sapta-sūkara-rathārūḍha), 展左の姿勢である。

[14] ラーフの尊容と観想 次に、YAM 字から生じた風輪において、HAM 字から生じた月と太陽を持つ、非常に獐猛なラーフ (Rāhu, 羅睺星) が戦車の中央で4尊の女神に囲まれていることを観想すべきであると説かれる。

[15] 四天女の尊容と観想 続いて、四方の女神 (四天女) を観想する。まず、東に赤いヴァルターリーを観想する。猪面で四臂を有し、右手に針と鉤、左手に罽索とアショーカーの樹を持ち、赤い上着を着る。同様に、南に黄色いヴァルターリーを観想する。アショーカーの小枝と糸を左と右の手に持ち、金剛杵と罽索を右と左に持ち、クマーリーの姿であるという。西には白いヴァラーリーを観想する。右手に金剛杵と針、左手に罽索とアショーカーの樹を持つ。展左の姿勢で、美しい姿であるという。北には赤いヴァラーハムキーを観想する。三眼で、四臂のうち右手に金剛と矢、左手に弓とアショーカーの樹を持つ、神々しい姿であるという。

[16] 供養と四梵住、空性の修習 供養 (pūjā)・敬礼 (praṇāma)・称赞 (stuti)・懺悔 (pāpadeśanā)・福德随喜 (punyānumodanā)・回向 (pariṇāma)・懇請 (yācana)・三宝帰依 (trīśaraṇagamana)・発菩提心 (bodhicittotpāda)・依仏道 (mārgāśraya) 等をなす。また、四梵住を観想してから「オーム、私は空性智金剛を本性とする者である」と唱え、空性と三昧を得るべきであるという。

## [2] 種子より生じたマーリーチーの観想

[2.1] 大日如来の観想 次に、日輪において OM 字から生じた大日如来を観想する。その姿は、獅子座に座し、体色は白色、覚勝印 (智拳印) を結び、寂靜相であるという。

[2.2] 本尊の観想 心臓の上の月輪で、25文字 (pañcaviṃśatyakṣaram) に囲まれた MAM 字の変化によって生じたアショーカー樹の上の月輪で、MĀM 字を観想する。この一切の変化によって、以前説かれた色や腕などの特徴を持つマーリーチーの姿を、自身に直ちに観想する。

[2.3] 四天女の真言と四方への布置 その後、「オーム、マーリーチーに、ヴァルターリーよ、ヴァダーリーよ、ヴァラーリーよ、ヴァラーハムキーよ、引き寄せよ、ジャハ、スヴァーハー」というヴァルターリーの真言等、四天女の真言を唱えて各々の女神を四方に布置する。

[2.4] 観想後の行為 真言行者は「オーム、マーリーチーに、マーム、フム、フ

ム、パット、パット、スヴァーハー」と、観想の直後に唱え、3回加持してから尊格の合一によって留まるべきであるという。

以上が no. 134 の概要である。次節において、本成就法の特徴を考察する。

### 3. 考察

SM no. 134 の前半部 ([1]) では、魔障を追い払う真言を唱えた後、具体的にマリーチーの姿が説かれる。世尊母マリーチーを眼前の虚空に留め、ラーフを戦車の中心に、四天女を四方に観想する。その後、供養等の行為を行い、四梵住と空性の観想を行う。儀軌の後半部 ([2]) では、前半で説かれた体色や手の特徴を持つマリーチーを自身に観想した後、四方に四天女を布置し、観想の直後に唱える真言が説かれる。

他方で、アーナンダガルバ (9-10C) 作とされるマリーチーの成就法 no. 142<sup>19)</sup> もまた、no. 134 と同様に三面八臂のマリーチーを説く成就法である。両者の次第の順序には異同があるものの共通する内容がある。簡単に no. 142 の概要を述べると、まず忿怒拳の布置、魔障退散の真言が説かれる (この場面は前述の no. 134 [1.1] に概ね対応する。以下同様)。次に世尊母 (マリーチー) の画像などを描く。世尊母や阿闍梨、仏菩薩を見て供養し、空性の修習を行い ([1.1] [1.6])、一切清浄真言等を唱える。後半部では、OM 字から変化した大日如来を観想する ([2.1])。次に MĀM 字から変化したマリーチーを自身に観想し ([2.2])、尊格の図像的特色と真言が説かれる ([2.2] [1.3])。続いてラーフの姿と、四方にいる四天女の尊容と方角、真言が説かれる ([1.4] [1.5] [2.3])。その後、智薩埵と三昧耶薩埵が合一し、灌頂を獲得する。最後に百字真言、諸尊の帰還、善根の廻向が行われる。以上が no. 142 の概略である。

no. 142 では観想の準備が整った後、種字から生じた本尊を観想する際に具体的な特徴が説かれることに対し、今回取り上げた no. 134 は観想の準備段階で既に具体的な尊格の特徴が説かれている。SM の基本的なプロセスでは、種字の光によって本尊や諸師、諸仏諸菩薩等を眼前に引き寄せることは、その後の観想に先立つ準備段階で行われる行為として知られている<sup>20)</sup>。

その中でも、特に本尊を対象として引き寄せる行為は、nos. 134, 142 のほか、nos. 14, 17, 26, 36, 135, 206 においても説かれるが、いずれも具体的な姿は観想の準備段階では説かれていない。例えば no. 206 五護陀羅尼マンダラの成就法では、冒頭に PRAM 字の光線から出現させた大随求明妃を筆頭とする一族 (五護陀羅尼

明妃)や眷属を伴った諸仏諸菩薩を眼前に見る。その後、種字より生じた本尊の具体的な尊容が述べられ、実際にマンダラを作壇して供養することが述べられている。

以上のように、no. 134は観想の準備段階で本尊の具体的な尊容が説かれている点が特徴的である。その理由は明確ではないが、先に述べたno. 142の観想の準備段階では「画像(パタ)等の世尊母(マーリーチー)の姿を描く」(paṭāḍigatamūrṭiṃ bhagavatīm avatārya)とあることから、no. 134の準備段階で述べられるマーリーチーの具体的な尊容は、観想以外に尊格を実際に制作することを示唆している可能性がある。マーリーチーは陀羅尼において具体的な造形法が説かれ、また、インドで作例が多く確認されている。これらのことから、マーリーチーは観想だけではなく、実際に尊像を造る行為も重要視されていたと推察され、その点がマーリーチー信仰の特色の一つであると考えられる。

五護陀羅尼もまた、実際にマンダラを作成することや、經典等を携帯することによってその功德を得ることが期待される尊格である。今回の成果を基に、陀羅尼經典から神格化された五護陀羅尼と、既存のイメージから神格化されたマーリーチーの特色を比較考察し、經典と神格化の関連性についてさらに検討したい。

- 
- 1) 陀羅尼が神格化する際、經典の内容が成就法に影響される例もある。例えば『サーダナ・マーラー』no. 206「五護陀羅尼マンダラ成就法」は、サンスクリット・テキスト版『大寒林陀羅尼』があげられる。詳しくは園田沙弥佳2017「『成就法の花環』*Sādhana-mālā*における大寒林明妃成就法」『印度学仏教学研究』66(1): 371-368において発表した。なお、掲載論文PDFおよび掲載論文を英訳した内容(“The Mahāśītavatī-sādhana in the *Sādhana-mālā* [in English]”)を以下に公開している。URL: <https://toyo.academia.edu/SayakaSONODA>.
  - 2) 6C後半頃の梁失訳『仏說摩利支天陀羅尼呪經』(T21, no. 1256)、8Cの不空訳『仏說摩利支天菩薩陀羅尼經』(T21, no. 1258)、10C後半の天息災訳『仏說大摩里支菩薩經』(T21, no. 1258)があげられる(塚本・松長・磯田編1989, 93-95)が相当する。また、京都大学所蔵写本no. 119 *Ārya-māricī-nāma-dhāraṇī* (Goshima and Noguchi 1983)は、天息災訳の冒頭と共通するという(足利1960)。
  - 3) Bhattacharya 1968a.
  - 4) SM no. 134 Kalpokatamāricīsādhana (D no. 3524, P no. 4346. 異訳に D no. 3228, P no. 4049).
  - 5) 森2001, 85; 高橋2001, 78.
  - 6) 塚本・松長・磯田編1989, 93; 足利1960, 142.
  - 7) 森2001, 89-90.
  - 8) 田村2018, 38-39.
  - 9) 森2001, 86.

- 10) 『ニシュパナ・ヨーガーヴァリー』 no. 17 に三面六臂のマラーチーが説かれる。
- 11) SM nos. 132–147.
- 12) 森2001.
- 13) 足利1960.
- 14) SM no. 142 Kalpokta-mārīcī-sādhanaṃ.
- 15) P no. 3661 の前半部は SM no. 138 に相当。
- 16) Bhattacharya 1968a.
- 17) 頼富・下泉1994, 210–213.
- 18) Bhattacharya 1968a, no. 134 を底本とし、サンスクリット写本に東京大学所蔵写本 (Matsunami 1965, no. 451), および、京都大学所蔵写本 (Goshima and Noguchi 1983, no. 119), チベット語訳 D no. 3524 を適宜参考にした。
- 19) 高橋2005, 68–74.
- 20) 清水1978, 62–65, 頼富・下泉1994, 42–29, 佐久間2011, 202–207 を参照。

## 〈参考文献〉

足利淳氏 1960 「摩利支天陀羅尼の梵本」『中野教授古稀記念論文集』中野教授古稀記念論文集編纂委員会, 135–143. ——— 1961 「Kalpokta-mārīcī-sādhanaṃ とその漢訳」『仏教史学論集』塚本博士頌寿記念会, 48–61. 佐久間留理子 2011 『インド密教の観自在研究』山喜房仏書林. 清水乞 1978 「インド宗教儀礼と造形——サーダナマラーを中心として——」『日本仏教学会年報』43: 59–72. 高橋尚夫 2005 「アーナンダガルバ作・摩利支天成就法」頼富本宏博士還暦記念論文集刊行会編『マンダラの諸相と文化』頼富本宏博士還暦記念論文集1, 法蔵館, 65–83. 立川武蔵 2009 『完成せるヨーガの環』研究(三)『人間文化: 愛知学院大学人間文化研究所紀要』24: 117–143. 田中公明 2015 『仏教図像学』春秋社. 田村宗英 2018 「Mārīcī (摩利支天) についての一考察」『智山学報』67: 35–43. 塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編 1989 『梵語仏典の研究 IV 密教経典編』平楽寺書店. 森雅秀 2001 『インド密教の仏たち』春秋社. 頼富本宏・下泉全暁 1994 『密教仏像図典』人文書院. Bhattacharya, Benoytosh, ed. 1968a. *The Sādhanaṃālā*. vol. II. Gaekwad's Oriental series 41. Baroda: Oriental Institute. Bhattacharya, Benoytosh. 1968b. *The Indian Buddhist Iconography*. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay. Goshima, Kiyotaka and Noguchi Keiya. 1983. *A Succinct Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the possession of the Faculty of Letters, Kyoto University*. Society for Indic and Buddhist Studies, Kyoto University. Matsunami, Seiren. 1965. *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library*. Suzuki Research Foundation.

(令和元年度科学研究費 JP19K12950 による研究成果の一部)

〈キーワード〉 インド後期密教, 摩利支天, 『成就法の花環』, *Sādhanaṃālā*

(目白大学助手, 博士(文学))